

## 平成 25 年度第 11 回石狩市厚田区地域協議会

【日 時】 平成 26 年 2 月 27 日（木） 18：30 ～ 20：22

【場 所】 望来コミセン みなくる 多目的ホール

【出席者】 12 名（15 人中）

| 役 職 | 氏 名     | 出欠 | 役 職 | 氏 名     | 出欠 | 役 職 | 氏 名     | 出欠 |
|-----|---------|----|-----|---------|----|-----|---------|----|
| 会長  | 佐 藤 勝 彦 | ○  | 委員  | 小 山 玲 子 | ○  | 委員  | 前 田 和 也 | ○  |
| 副会長 | 渡 邊 教 円 | ○  | 委員  | 今 光 江   |    | 委員  | 美 馬 康 子 | ○  |
| 委員  | 大 黒 利 勝 | ○  | 委員  | 柴田 志寿子  | ○  | 委員  | 盛 重 栄 司 | ○  |
| 委員  | 小笠原 英史  | ○  | 委員  | 柴 田 肇   | ○  | 委員  | 築 田 敏 彦 |    |
| 委員  | 河 野 すみれ | ○  | 委員  | 高 橋 敬 二 | ○  | 委員  | 吉 田 美 香 |    |

※正副会長を除き、あいいうえお順

支 所 ～ 尾山支所長・池垣課長・熊谷課長

事務局 ～ 高田課長・栗谷主査・渡部主任・永澤主任

（地域振興課）

【傍聴者】 1 名

【次 第】 1. 開会

2. 会長あいさつ

3. 情報交流（リラックス タイム）

・地域の「ちょっといい話題」交流

4. 報告事項

・厚田区コミュニティ「ゆめ倶楽部」の取り組みについて

・地域おこし協力隊の動きについて

・石狩湾新港開港 20 周年（国際貿易港）記念事業について

5. 協議事項

・住民主体による新たな地域づくり（資料 1・2）

～地域の将来を見据えた対策について②～

6. その他

・次回会議の日程について

7. 閉会

## 1. 開会

高田課長： 皆さんお晩でございます。地域協議会に入る前に、今委員、築田委員、吉田委員の3名から欠席の連絡を受けておりますので、報告をさせていただきます。

平成25年度第11回石狩市厚田区地域協議会を開会致します。会長から挨拶をよろしくお願い致します。

## 2. 会長あいさつ

佐藤会長： 皆さんお晩でございます。挨拶は省略させていただきます早速、会議の方に入りたいと思います。

## 3. 情報交流（リラックス タイム）

## 4. 報告事項

- ・ 厚田区コミュニティ「ゆめ倶楽部」の取り組みについて（厚田支所地域振興課栗谷主査から口頭説明）
- ・ 地域おこし協力隊の動きについて（厚田支所地域振興課高田課長から口頭説明）
- ・ 石狩湾新港開港20周年（国際貿易港）記念事業について（厚田支所地域振興課高田課長から口頭説明）

## 5. 協議事項

### 住民主体による新たな地域づくり（資料1・2）

#### ～地域の将来を見据えた対策について②～

佐藤会長： 「住民主体による新たな地域づくり」～地域の将来を見据えた対策について～の2回目となります。1回目はそれぞれ皆さんの組織などの意見を出してもらいまして、それをまとめたのが資料1となります。今回は、その資料を元に検討をもっと深めようかとも考えましたが、問題はこのようなたくさんの地域課題が上がって参りましたので、この地域協議会の委員だけでは、これだけ多くの地域課題を解決するのは難しいだろうという事で、地域をどう巻き込んでいけば良いかを今回の第11回協議会の意見を踏まえ、地域協議会の意見だけではなく、更に広く住民を巻き込みながら、地域課題をどう解決したら良いかという事のご意見をいただこうと思いました。その意見を突然出して下さいと言っても難しいと思いますし、また、どこの過疎地域も地域づくりでは困っており、一人でも多くの住民がそれに参加して、地域づくりをしていただきたいと行政やリーダー達も考えている訳ですが、非常に難しいところで突然言ってもご意見をいただけないのかなと思いますので、先に、先進事例を説明したいと思います。

資料2の海士町の例を挙げて、地域の人々に地域づくりの課題に果敢に挑戦してもらう仕組みづくりを考えてみたいと思います。また、A4サイズ3枚のカラー両面刷りの資料【地域づくりの事例】島根県隠岐郡海士町の紹介を先にさせていただきますと思います。

隠岐郡といいますと、後鳥羽上皇が島流しになった場所としても有名な所です。この隠岐郡は島根県の北側にあり、四つ位ある島の一つに海士町というのがありまして、人口が1970年代に4,300人いたのが、現在では2,300人と減り、厚田の人口に非常に近い状態です。そこに第1次産業から第3次産業までの就業人口の割合が記載されておりますが、やはり第3次産業の割合が半分以上となっておりまして、第1次、第2次産業というのは合わせても約38%となっており、どこから行くかといいますと境港市という事で、皆さんが

ご存じかと思いますが、「ゲゲゲの鬼太郎」の町になります。境港からフェリーで4時間程度かかり、北海道で例えますと稚内から礼文島に行く位の時間になり、その位離れた離島となります。この離島の凄いところは、現在200名の移住者がIターンやUターンをしてきており、主に東京、関東方面からとなり、地域づくりに成功した町の事例として、良く挙げられているのがこの海士町となります。成功する前は夕張市のように財政再建の対象となる寸前の町だった訳ですが、それに危機感を覚えた町長が自分の給与を50%カット、町の職員も30から40%カットということを議会の反対を押し切り断行しました。ここで集まったお金を自立化する為に使おうと幾つかの事を始める訳ですが、その時のスローガンが「公共事業をやめよう！」と掲げた訳ですが、公共事業を辞めるというのは非常に大変な事です。どうしてかというと、公共事業で生活をしている人が多く、どこにも島にも必ずありますのが土木建築業であり、相当な反対を町長が押し切って行った訳ですが、この辺の勇気が何事を始めるにしても凄いと思いました。自分達の給与をカットした事により発生したお金を地域資源やブランド化に投入して生まれたのが岩牡蠣「春香」ですが、これは爆発的に関東方面で売れました。それから隠岐牛というブランド牛、海士乃塩にお金をかけてブランド化もしました。ここで獲れる海産物をCASシステムというものを導入し、急速冷凍しても組織を壊さない技術を導入し、冷凍してから都市圏へと送り出します。

それから隠岐牛については、公共事業が出来なくなった事により、地元で猛烈に批判していた建設会社の人が背に腹は代えられないという事でブランド化をし、今では非常に高価な牛でサシが入っており、7段階あるそうですが、神戸牛の元となっている牛を飼育し、その品種を更に改良し、その土地に合った牛にしたのが隠岐牛となります。

また、人口減少により、島にある高校が存続する事が出来なくなり、島外の高校へ子供を通わせなければならない状況となった訳ですが、その寸前で町長は、Iターン、Uターン者という事でこういう方達は非常に若い人が多く、子供達が将来大きくなって高校へ通うとなった時に、島の外へ出してしまうと戻って来なくなるので、高校は島の中でどうしても維持しなければと考え、数人の移住者達が中心となり、高校生に対する教育プロジェクトを実施しました。どんなプロジェクトかと言いますと、島で丸ごと子供達の教育をしようというプロジェクトになります。それから一人一人が主役になる学校としてはどんな学校かという生徒数が90名ですから、普通であれば廃校や統合になる訳ですが、ここには二つのコースがありまして、「地域創造コース」と「特別進学コース」となり、「地域創造コース」は地元で仕事を創るという事で、地元で就職するのではなくて高校生が自ら地元で新しい企業を立ち上げるというコースとなります。それから勉強が好きなので大学に行きたいという子供達に対しては「特別進学コース」があり、当然、島には塾が無いので公営塾を作っています。町の税金を使って塾を作る訳ですが、全国を見ても初めてとなる進学塾を作り、実績も上がってきており、慶応大学や早稲田大学などへ進学コースから入っております。それから2ページ目になりますが、私が驚いたのは子供議会がありまして、中学生が議会を行なう訳ですが、話し合いを行なって出た結論に対して町が予算付けをし、その中学生は決まった物事に対して実行しなければなりません。この中学生が提案した6割が予算化されて実施しているというのが凄いと思います。資料内に全て記載する事が出来ませんでしたが、これは中学生だけではなく、島丸ごと学校と言いましたが、島民が中学生の提案に対して協力してくれます。例えば、計画を立てたり、計画書を作る事も島の人達が手伝い、更に実行の段階でも親や地域の人を手伝う。そして必ず子供達が提案をした計画を成功させるというのがモットーとなります。どの提案も必ず成功するという実感

を子供達に持たせようというのが凄いと思います。一つの例として、なぜここまで出来るのかという問いを出してみたところ、答えは「みんなで町をどうするかを話し合う!」、これしかないという事です。話し合いのテキストとしては、本日皆さんへ配布しております資料2「海士町をつくる24の提案」というのがテキストそのものとなります。この24の提案ですが、町民が覚悟を決めてみんなで実行する以外に特效薬はないと住民が語るほど、住民が総出でこの島の地域づくりに参加する意欲を持っている訳ですが、そうするまでには道のりも凄く長かったのではないかと思います。今日は皆さんにお配りしたその「海士町をつくる24の提案」という事で住民提案集となり、一家に一冊では無く、一人に一冊配布したようです。それはどうしてかということ“自分の問題として考えてもらう”ために、一家に一冊だけとすると読む人と読まない人が出てくるので、小学生以上一人一人に一冊を配布したようです。この中身は、非常にプライベートなものからパブリックなものとなっておりまして、まずは私が一人で出来る事は何かという事から始まり、10人で出来る事で友達や家族と協力して一緒に出来る事は何かというのが提案されております。それから100人で出来る事で、これは学校とか産業界や組織、グループでできるというもの。それから1,000人で出来るのは、地域ぐるみや行政と一緒にという事でいわゆる協働という作業で1,000人で出来る事というように、それぞれ人数で別けて24の提案をしています。これを一人一人配りましたが、配っただけでは駄目なので、24の提案を形にするために次の5点が挙げられています。

1つ目として、海士町をつくる24の提案（別冊）の説明会の開催。各地域で役場の担当者や「未来をつくる会」と立ち上げました。この会は町長が最初にこの提案書を作るため、公募により町民に呼びかけを行ない、30名程度集まった人達を「未来をつくる会」としました。現在もその会を中心に動いておりますが、「未来をつくる会」と役場の担当者で具体的に地域に説明をします。

2つ目として、別冊から「1人でできること」の中から自分の興味ある活動をまず初めて下さいと呼びかける訳ですが、それをやりたいという人達をサポートします。

3つ目として、役場の担当者が提案書と共に実施計画を作成して予算を申請します。予算化されたものから具体的な活動を住民へ説明し、その計画者は住民にこういう事で予算が付いたので一緒にやりませんかと呼びかけを行います。

4つ目として、興味のある提案があったら担当者が促す会合に参加します。

5つ目として、計画し、予算化した担当者らが会合を開き、呼び掛けた住民たちと一緒に実施するという事になります。提案を実際に動かすためにどんな事をしなければならぬかという事を良く検討し考えて、支援する組織や相談できる人と会って具体的な活動に入っていきます。これが提案を形にするという動きになります。その時にアイデアを形にするために5つのステップがあり、非常に面白く感じました。

1つ目は、これは難しくすぐに出来ない理由探しをする訳ですが、出来ない理由探しをせずに、出来ないための条件探しをしましょうというのがアイデアを形にするための第1のステップとなります。

それから私達が「出来る事から始めよう」と良く言いますが、でも、「出来る事を広げよう」というメッセージなんです。「出来る事から始めよう」というのは一人であり、最初は一人なんです。必ず家族、友達、グループや組織という事で形を広げていこうというのが2つ目のステップとなります。

3つ目は、「何々しなければならない」ではなく「みんなでこういう事をしよう」というお祭りのような活動を繋げていく。

4つ目は、この活動は成功するとか失敗するとか良いとか悪いとかと「白黒をつけるのが目的では無い。」ということです。

5つ目は、「みんなに喜ばれる活動を作りだす」という5つ目のステップに入ります。この提案を形にする。それからこの5つの提案、アイデアを自宅に貼っている方が結構多いという事を良く話しに出てきて、これは仕掛けとなります。住民がみんなで行うために、どう仕掛けを作っていったら住民が一人一人参加出来るかという事の仕掛けづくりです。最近、厚田も全国と同じように過疎化が進行しており、この過疎化は厚田よりも浜益の方がより一層深刻であり、北海道は中心部に行くに従って、すなわち都市化の周辺に行けば行くほど、過疎化が広がってきております。全国で300の市町村がなくなるだろうと言われており、黙っていると段々過疎化が進んでいくので、過疎化を食い止める事は出来ないとしても、過疎化していても元気な地域を作っている所はたくさんあるので、それらは将来のモデルになると思います。例えば、石狩市では、今は微増ですが人口動態を見てみると、あと5年か6年後には人口が減少するのが解っています。それは、人口が増え続けている札幌市ですら減少する訳なんです。東京都についても同様の事が言われ、今までは東京など大都市が先進地域だったのが、どんな田舎でも自分のところも東京のような便利なところになればと思っていました。田舎になればなるほど、東京に憧れていた訳ですが、これからは、必ず先に過疎化していても、そこを元気にし地域づくりをしていくところが先進地となると言われております。

そこで出て来たのが3ページにある「1. コミュニティ・デザイン」になります。今までは、公園を造ったり、建物を造ったりというのが主なデザインとなりまして、ハードとなります。我々が着る物、履く物、建物や衣食住のハードが全てデザインとなります。ところが、公共事業には予算を使わないというところが出てきますから、国も公共事業は大変難しくなってきたりまして、建物というハードにお金をかけるのは非常に難しくなってきたりしております。ですから今までのデザインというものの価値観も変わってきており、ハードを前提としないコミュニティをデザインしていくという動きに必然的になってきますので、今まではコミュニティ・デザインというのは、施設設備を前提としていたのです。3ページの最初にあります「コミュニティ政策型」というのは、行政と専門家が一緒になり、あそこにこんな公園をつくるとか、ここにこんな団地をつくろうという事で、全てがつくられた場所に住民が行き、言ってみれば宛てがい扶持なんです。これも当然、高度経済成長の時に都市部へ人口がどんどん集中していきましましたから、まずは住む所があれば幸せなので、自分達の周りに子供達が遊ぶ公園があればそれで十分だと満足していました。これがコミュニティ政策型の第1期目で1960年から1970年代です。正に東京、大阪、大都市中心にどんどん人が流れていったそういう高度経済成長の時代でした。今度は、その高度経済成長が一段落し、急激な右肩上がりの成長ではなく徐々に成長していき、人々もある程度の蓄えや生活に余裕が出てきました。そこで今度は「住民参加型」のコミュニティ・デザインが出て来たのが1980年代であり、公共施設もそこで使う住民の意見を取り入れて下さいという事で、「住民参加型」のワークショップや計画が立てられるようになったというのが第2期です。そこに集まってくる住民は限られた人々で、ほんの一部となります。今度は、その人達と行政や専門家で先ほどの「コミュニティ政策型」と同じで行政・専門家達が中心となり、一部に住民が参加する形となったというのが第1期、第2期です。ところが先ほど言いましたように2000年代に入ってから日本は今までの経済成長とは違ってまして、色んな難しい地域課題や日本の国としての舵取りが非常に難しい時代に入って参りました。それと同時に、私達はある程度の生活の余裕、或いは豊かさを手に入れた

ものですから、価値観が非常に多様化し、今まではコミュニティというのは地縁型だった訳で、まだ貧しく豊かではなかった時には、向こう三軒両隣でお塩を借りに行ったり、色々な物を借りに行っていくという地縁型のコミュニティが出来上がりましたが、ある程度の経済的な余裕と個人の自由、色々な形で地縁型のコミュニティが段々と希薄になってきて、そこに人間関係の希薄さがあり、プライバシーや個人情報など色々な問題が出て参りまして、そういう難しい画一的な個人の意見ではなく、多様な個人の意見を聞きながら、公共施設なり、地域行政を行うというのは大変難しい事でみんなを満足させるのは難しいので、そこで出て来たのが地域の人達の意見を聞き、公共やコミュニティのデザインを行っていくにはどうすれば良いかというときに、生まれたのが町づくりワークショップなんです。要するにみんなの意見を総合して聞き、多くの人達の意見をなるべく行政に取り入れていくという町の「地域づくりワークショップ」です。例えば、利用者の減った施設を楽しい場所へ変えていくにはどうしたら良いか。これは行政が考えるのではなくて、それを利用する住民が考える。もっと言いますと人々の幸福というものの定義が変われば、地域が変わるだろうということなんです。豊かなものや便利なものが本当に幸福に繋がるかどうか、例えば過疎化している地域の人達が考えて、都会よりずっと幸せだと考える人が増えれば価値観が変わりますので、この3ページのコミュニティ・デザインの定義というのが今の定義となりますが、地域課題をみんなで楽しく解決するというのが、コミュニティ・デザインとなり、人々がどうやって繋がっていくか、地縁的な繋がりではなく、趣味の会などあると思いますが、その繋がりをどう作っていくか、これが現時点におけるコミュニティ・デザインの中心的な課題です。先ほどの価値観の変化という事で4ページを見ていただきたいのですが、私達がどうして地域を一生懸命変えていこうと言いますか、地域のために頑張るのだろうという事理由なのですが、今まで私達が作ってきた社会というのは、もう崩壊してしまい、バブル崩壊や人口減少、少子化、それから大量生産・大量消費・大量廃棄と何でも捨ててしまう訳で、本来であれば3世代に亘って使える物であっても、一代で捨ててしまう。もう限界だという事も皆知っている訳ですが、誰もどうもしない。CO2が増えて困ると言っても電気を節約するという事を真剣に考えている人はいるのかどうか、それはどういう事かという真ん中に掲載している「負の循環」に入ってきている訳です。日本だけではなく、先進国やアメリカも全てそうです。この「負の循環」とはどういう事かと言いますと、少子高齢化というのは当然、人口が減ってきます。1970年では、高齢化率が7%となっておりましたが、2055年には65歳以上が40%という事が人口統計から明らかに解っております。人口が減少し、高齢化することで、当然としてそこで働く人の人口が減少し、こうなると必ず経済が低迷します。経済が低迷すると人が減って税金を収めなくなり、それから企業が税金を納められなくなり、当然、財政状況が悪化することが目に見えます。財政状況が悪化すると、子供を豊かに何人も育てるような事が出来なくなり、更に少子化に拍車をかける事になります。この循環を永遠に続けていったらどうなるかという、結局は減びる所は減んでしまう。どう減びるかはその次に書いてありますが、こういう状況で人々は考えるようになりました。物の豊かさから心の豊かさへ当然変えていかなければならない。私達はブランド物を買って幸せを感じていましたが、ブランド物を手にするよりも幸せに感じる事が自分の人生であるのではないかと考えるようになりました。この最たるがアメリカ型資本主義です。アメリカが100年行ってきた資本主義ですが、アメリカが自分の国を中心として行ってきた資本主義をアメリカ型資本主義と言います。ところが、これに限界は当然見えてきているし、私達は一生懸命汗水垂らし、それを売ってお金を得るという実態経済をマネー経済は崩壊させており、汗水垂

らしてお金を得るという実体経済をマネーが操作する事によってそれを壊している。マネーは一部の人達に億万長者を作ると言われておりますが、マネー経済と言うのは、やくざ資本主義なんです。このやくざ資本主義を私達は堅気の汗水流し、それが必ず自分の幸せになるような経済にしようと提案したのが「里山資本主義」といいます。藻谷浩介さんという方が著者で、この「里山資本主義」という本を書き、15万部を売り上げている。これをひと言で言いますと、アメリカ型のやくざな資本主義から故郷或いは里山で幸福に暮らす暮らし方に価値観を変えていこうと提案している「里山資本主義」。これはNHK広島取材班と一緒に作られた本になりますが、角川書店から出ています。私達は徐々に価値観を変えつつあり、負の循環から抜け出す方法は価値観を変える事以外にないので、価値観さえ変えれば私達の人生は変えられるという意識で、5ページになりますが、地域づくりワークショップを地域協議会の皆さんとも行いました。新しい地域協議会委員になる前の委員の皆さんとも実施しましたが、この地域の良いところ、また残しておきたい地域の魅力は何なのだろうという事、地域を活性化するためにこんなものがあれば良いなというものを皆さんで話し合ってもらいました。ここで次の問題になりますが、こんな物があれば良いなという時に先ほど言った私達の意識変革や改革が出来ているかというのが次の問題になります。つまり都会にあって便利で良いものが自分達の村にあったら良いともし、思ったとしたらそれは「負の循環」から脱皮出来ません。都会にあるものではなく、田舎にあるものでなければ駄目なのです。私達の身近にある魅力で、その魅力を引き出すためにこういうのがあったら良いなと言うのは副題なんです。すなわち、この地域の魅力を活かすという事で、地域の人も喜ぶけれども、遠くから来る人達も更に喜ぶ地域の魅力を出すために、こんな物があったら良いなと言う二次的な課題です。そこでこの地域課題の解決に向けて、住民や行政、専門家が一緒となりワークショップを開催しました。そういうワークショップを行なうための鍵は何かと言いますと、地域おこしの鍵という事で“コンセプト”は都市部となり、便利で豊かで羨ましいと思われる都市部では手に入らないようなものをこの厚田で提供するという事です。その厚田で提供するものは、私達は無い物ねだりはしない。都市部であれば手に入るけれども、自分の所では手に入らないものをねだっているのではないか。地域にはこんなに素晴らしいものがある。例えば、地域の自然、里山、風景を提供できれば良い訳であり、これは都市部にはないもので、厚田にしかないものです。それから、新鮮で安心、安全な食材を提供出来るのも厚田にしかない。これは都会にはありません。ゆったりとした時間や空間を提供し、私達は地域の人達と一緒にになり、助け合いとおもてなしの精神を持って、住民だけではなく、外から来る人達もその精神で行こうという事です。都会では、マンションに住んでいて1年経っても隣に誰が住んでいるかも解らない状況であり、コンセプトは大会館にあるもので無い物ねだりはしないけれども、この我々の地域の魅力をどう出するか、或いはどうそれをみんなに知ってもらおうかという事だと思います。ここからの部分が最後となりますが、今日お話しする中で一番大事なところになるかと思えます。集落を診断するというのは、結構大変な事で、北海道自体がほとんど過疎化集落であり、その集落を診断するためには、二人のファクターが必要であり、1つ目は、GISによる基準という事です。GISとは何かという事を説明しますが、これは国交省の中の下部組織に国土地理院というのがあり、その国土地理院で日本全国の地域の人口や、色々な数値データを一手に整理している大きなデータベースとなり、GISのGはgeographic、Iはinformation、Sはsystemとなり、地理のデータとなります。例えば、石狩市厚田区の人口はどの位で面積はどの位なのか、また、産業就業率がそれぞれ何%で占めているか等、色々な数値データとなります。平成7年の阪神淡路大震災

の時にこの地域データがしっかりとしていなかった事から、復興に非常に多くの時間がかかるというのが解りました。それで凄い予算をかけ、本格的にデータベース化を行なっているそうです。ですからここにアクセスすると日本全国のほとんどのデータが手に入ります。それはそれぞれの地域の人口、高齢化率、病院の有無やその距離、学校があるのか子供を通わせるのにどの位の距離があるのか、14歳までの子供がどの位いるのか、公営の住宅、住宅、教員住宅も含めて、今使える物があるのかという事を客観的なデータとして集めているので、地域を診断するために捉える。次に、住民の意識が2つ目の基準となります。住民の生活と例えば、住民一人一人の暮らし方、年齢や男女の別や夫婦二人だけなのか、或いは同居人がいるのか、独居老人なのかという事で色々ありますが、そういう人々がどんな生活をしているか生活の便利さや不便さという事で買い物なども住民に不便を感じていないか聞く訳です。買い物難民になっていないか、足の部分で不便を感じていないかなどそこに住む住民の意識を調査します。それからその住民が自然環境をどう思っているか、産業基盤がしっかりしていないので働きたくても働く場所がない、生活用のための水道、下水道等の生活するためのインフラが整備されているかどうか、不便を感じていないかどうかなど、そこに住む住民の意識を調査します。1つは客観的データ、それからもう1つは住民意識となりまして、最期の結論ですが、GISで数値が高いのは一体、どういう事なのかということそれは正に便利な地域だということです。この図のGISが下になればなるほど不便な地域という事になります。それから高齢化率も高いし、限界集落や少子化により子供の数が少ないという事で過疎化。色んな地域課題をたくさん含んでいるというところがこのGISの低い地域となります。今度は、一人一人の住民意識を聞きました。そうすると一人一人の住民意識の高いもの低いものがあります。ここが不便で住んでいるのが嫌だとか、ここは住みにくいので早く娘の所に行きたい、多少不便でもここが素晴らしいから住んでいたいという意識を持っているのかという住民意識が高いか低いかによって、その地域をどうするかという鍵がそこにはあるんです。そうするとGISが高くて住民意識が高かったら黙っていても地域力が高いんです。だからわざわざ苦労して地域づくりに真剣にならなくても、自ずとそこは住みやすく非常に良い訳ですが、大変稀なケースです。都会でもこのような事はあり得ないので、地域力や地域の課題が変わるというのは、非常に期待できる事であり、GISや色んなインフラなどが高いけれども、住民の意識が低い。これは住民の意識改革をしなければならない訳で、先ほど言ったとおり住民は人任せであり、人に任せておけば地域がどうにかなると思っている訳ではなくて、住民一人一人が地域づくりのために自分が参加するという事で先ほど言ったような海士町のような仕掛けをしないと住民の意識は変えられないんです。もう一つは住民意識が高いけれども、GISが低いというのは非常に期待できるのですが、まずは税金を使って出来るインフラをそこです。住民が快適にその地域で住めるようにするという事で色々課題を解決するためには、お金があれば良いので、これは寄付で集めようと何しようという物をつくれるという事で、意識が高ければ壊れていて、もう使わなくなった空き家を住民意識の高い自分達でそこを使えるようにする、これは意識の低いところよりは良いんです。このように地域はこういう判断をしなければならない。住民一人一人にこういう意識調査をするというのは非常に時間もかかり難しいので、これを役場の人にやって下さいとか行政の人にやって下さいというのは大変難しいので、例えば、大学のこういう事を勉強している若い人達に住民意識調査を手伝ってもらったりするのを1ヶ月間位で実施したり、GISは数値データですので、パソコンを使い、簡単に欲しいデータを作り上げ、地域を診断する事が必要ではないかなど、それらを基にしながらこの海士町の地域づくりの仕掛けを少



し勉強しながら、この地域協議会と地域協議会委員が自分で何かを立ち上げながら行っていくという事に関してはこの人数なので限界があります。ですから、仕掛けをこれから作っていくという事で1人でも多くの住民に参加をしてもらい、地域を元気にしていくという仕掛けを何とか私達で知恵を絞って、この協議会から作っていったらなと思い提案をしました。何度か議論を重ねないとこれは他所のものまねでは中々上手くいかないと思うので、この厚田という実態に合わせて作っていかねばならないと思います。ただし、海士町は2,300人で厚田とほぼ同じ人口ですが、町役場なんです。ですから、町長がOKを出して町議会がOKを出せばすぐに出来る訳です。先ほど言った中学生が提案をして、島全体が一つの家族と見ているので、家族の長がやろうという出来るんです。ところがこの厚田区は6万人の大きな石狩市と議会を通しながら、市長がうんと言わなければ出来ないで、それは海士町とは全く違います。ですから、戦略も方向も全く違った形でこの厚田区に合った方法でなければ、当然出来ないで、そういうアイデアを皆さんと一緒に考えて、ちょうどこの地域協議会も5期10年の節目となりますので、そういう仕組みづくりが出来れば、次の委員会に手渡しても、その仕組みづくりで地域そのものが動いていくだろうと思いますので、この地域づくりをどうやっていこうかという事を皆さんと色々とお話しをしながらアイデアを出し合って、是非、厚田区を元気にして、これを次の世代にと思っており、ここで育った子供達が厚田は面白いと思い、厚田に必ず帰ってこようと思えるようなところになると良いと思いますが、私達はすぐに産業がないと帰って来ないと思ってしまいますが、海士町は高校生が自らそこで起業する仕組みを考えるというのが凄いです。私達の年齢になりますと高度経済成長で成長する時代をずっと見て来たので、頭の中のイメージや価値観は豊かで便利というイメージが浮かんでしまいます。しかし、本当に何も無かったとしたら今、家では石油ストーブを付けてどんどん石油を焚いていると思いますが、全く不経済な訳で、薪を焚くというのを覚えた時には、石油がほとんど必要なくなる。健康のために山歩きをしながら薪を拾い、粘土を使って自分で窯をつくり、薪で美味しいご飯の炊くという事を覚えたとしたら、石油代もほとんどいらぬんです。ですが、そこまで価値観を変えて出来るかどうかという事もあります。早晚そういう事をしなければ食べていけない時も来るのではないかと私は思っており、次の世代の子供達も同じような生活が出来るという風に真剣に想っているのかと思います。思っている、その子供達に対してどうすれば良いかというと、あまり手がない訳で、皆で考えて次の世代へ残していく方法を考えないといけないとは思いますが、皆さんどうでしょうか。

渡邊副会長：           なかなか難しい問題だと思います。

佐藤会長：           私はこう思うのですが、難しいから他の過疎地域で出来ない訳で、そう思うとここで何が成功すると海士町の事例のように全国的にモデルにしようという風になると思うし、北海道というのは結構な過疎地なので、なぜ北海道は過疎地なのかと言いますと遠いからというだけではなく、こういうのをモデルにしてやろうという所がないんです。だから地域づくりを一生懸命実施しているところというのはたくさんあり、成功しているところもあるんですが、北海道の過疎地は色んな意味で難しい。例えば、厚田で地域づくりが成功したとして凄いと皆が思ったとしても、内陸部の小さな市町村でそれが出来るかというと私達がすぐに考えられるのは、厚田は190万の人口を1時間の移動時間内に抱えているが、他所の町村では6時間以上移動に時間がかかったりという所もあります。厚田は何かをす

るとそういう人達を呼び込める条件があります。そう考えると厚田区は地域課題を解決するためには、良い条件ににいると思うので、やれば出来ると思います。出来ないというよりも出来る条件を考えようという事だと思います。厚田は色々あると思いますが、ワークショップの中で厚田の魅力や良いところを出してもらいまして、先ほど言い忘れましたが、住民参加というのは計画の段階で雲散虫をしてしまうので、行政主導のワークショップをした時にみんなでアイデアをポストイットに出し、島を作って行いますが、終わってさよならとみんな流れてしまう訳です。この地域づくりワークショップの一番の課題は、集まった人を次に繋げないとならないので、計画づくりでみんなさよならでは駄目です。計画を作ったら皆さんで実施しようという実行部隊が必要となり、計画部隊から実行部隊に繋いでいくという事をしないと計画づくりだけに参加した住民は何かおかしいなとみんな思う訳であり、そういう意味では地域協議会で色んなアイデアを出しながら、7つの団体を立ち上げながら活動してきているというのは、実は計画と実行をセットで行なってきた訳ですから、手前味噌とはなりますが地域協議会が地域づくりのために団体を立ち上げて活動しているのは、ある意味でセオリーとして成功していると思います。そういう意味では、あと一歩住民が参加出来るような仕掛けをどうやってつくっていったら良いかという事になります。

次回もこれが続けたいと思いますが、皆さん達にはこの海士町の24の提案について、テレビを見ながらでも構いませんので、そうかこういう提案をしてみんなでやるんだな、中にはこれは腰を据えないとなかなか出来ないな、色んな条件が揃わないと出来ないななど色々ありますが、私は個人的に良く出来ていると思いますので、この次は皆さん達に是非、多くの住民を巻き込んで行なうという地域づくりについて、皆さんのご意見をいただきながらその仕掛け、仕組み作りをこの厚田区ならではの地域づくりの仕組みをつくっていきたいと思います。

大黒委員：       なかなか難しいと言ってしまうとマイナス思考になりますので、それをプラスに考えると今までずっと実施してきて感じるのは、厚田区は意欲が凄くあると思います。旧石狩市のエリアに私のゲートボール仲間がおりまして、新聞の記事を見ると厚田区の活動ばかりが載っていると言っており、その位厚田と言うのはまとまっていると皆さん思っているようで、そう見られるというのは地域協議会の今までの活動、計画と実践が上手く溶け込んでいるのではないかと考えております。これからは、住民への意識付けの方法だと思います。良いアイデアがありましたら教えていただきたいと思います。今の案に関しては、凄く立派だと思いますし、読むとアイデアが沸くかも知れません。

佐藤会長：       是非、読んでいただければと思います。今、大黒委員のお話にもありましたように厚田区の人達というのは地縁的な部分も含め、新しく来た人達も中に入りやすく繋がりが強いのではないかと思います。

河野委員：       繋がりが強いゆえに何の会を開いても、同じメンバーばかりが集まっているという事が多いので、出来るだけ幅広く色んな人を巻き込んで、みんなの意見を聞きたいと思います。それと今日凄く会場が寒く感じ、大きなホールなので暖房の音などにより声が吸収されたりするのかとも思いますが、非常に声が聞きづらく一緒にいる人達が遠くに感じるのも、例えば、みなくるの和室でみんなが身近に話す。座談会に近い感覚かもしれませんが、そうするともっと意見が出るのではないかと思いますし、参加もしやすくなるのかなと思います。

ます。どの会議でもいつも同じメンバーという事では無く、幅広く誰でも参加できるようになればと思います。

佐藤会長： 距離が遠くなればなる程、形式的な意見を言うと思いますので、距離が近いと楯前ではなく、本音が出てくるというのは人間同士の距離感はあるかも知れません。

河野委員： 距離が凄く近い人達が多いので、逆にその関係と違う関係の人は入って行きづらいと思います。

盛重委員： 私も厚田の色々な活動をみていると集まってくるメンバーが同じであり、同じメンバーで違う会議をしているという事が多々あり、そういう人達はすごく意欲的で先程の表でいくと意識が高く、凄く良いメンバーが厚田の住民には多いとは思いますが、それ以外の住民の方をもっともっと参加して欲しいけれども、逆に意識の高い人達が集まり過ぎて、壁になっているのかも知れませんが、新しい人が増えていかないというのをまずどうしたら良いのかというのと、座席の距離の話もありましたが、昨日も別件で6名程の会議を開いた際、最初は真ん中に空きスペースがあった訳ですが、机を合わせそのスペースを無くしてから結構、良い意見がその会議の中でも出ていたので、そういう意味ではこの協議会の会場の真ん中にある空間と言うのは無ければより良いのかなと思います。どうしてもこういう協議会になりますと仕方ないという部分もあるとは思いますが、そういう意味だと意見を沢山出してほしいというのであれば、自分が行くPTAの会議などもそうしております。相手との距離を縮めると意外と意見が出るようになりますので、先ほどの意見で改めて感じたところです。また、地域づくりが出来るための条件探しという部分では、会長が言われていた札幌市がすぐ隣ということで利便性では確実に札幌には勝てない訳で、厚田から札幌市へは30分なり1時間かけて行けば便利な物が何でも揃っているの、そこには勝てないと考えたら逆に札幌市の人達は厚田にも来やすいはずだと改めて感じました。住民として厚田に定住するということはなかなか難しい事だとは思いますが、日帰りであったり、月1回、週1回であれば厚田に来たいという人はいると思いますので、厚田に来る事によって幸せを感じてもらえることを考えると、地域づくりをしていくのがやはり大事なのかなと感じていました。

佐藤会長： 逆に札幌と近いので、海士町みたいに200人のIターンやUターンというのは期待出来ないと思います。どうしてかという便利な所に暮らしていて、ある時にこっちに来たいというのに対して、厚田がどう受け皿としてセット出来るかというだと思います。次回は、皆さんから沢山の意見をいただきたいと思いますし、会議の配置も考えたいと思います。

小山委員： 札幌から1時間位の所だから厚田は凄く良いところだよねというのは凄く言われますが、やはり札幌から近いがゆえに駄目なところも沢山あり、子供達が札幌等へ出て行ってしまったりという部分もあると思います。厚田の良いところとしては、隣近所が凄く仲が良く、若い人が周りのお年寄りに対して干渉し過ぎない程度で見守っているというのはあると思います。やはり同じ位の年代の人が集まるというのがありますが、何かをしようすると意見が沢山出てきますので、それは駄目だとか良いのではないかという意見も出てきますから、気軽に集まれるような機会があれば、積極的な意見が出てくるのではないかなと思います。当別町辺りは新聞など見ると、結構色々な事をしている気がして、役場の人

なのか部外者の方なのかは解りませんが、色んな事を試されている気がします。そういった意見が住民から出ているのか役場の方から出ている意見なのかまでは解りませんが、外から来る方の意見というのも新鮮な感じがします。

前田委員： 先週の話しになりますが、札幌の方から乾燥シイタケを買いに来たというお客さんがラ・もうらいに突然やってきまして、そのお客さんというのは朝市にも行きたいし、お寿司も食べに行きたいという事で、僕らもイトーヨーカ堂など色んな福祉の関系の催事に参加をさせていただいているんですけども、僕は出来る事から始めて行こうかなと思ったのは、この催事を通して僕らの施設のアピールをするのも良いんですけども、厚田のアピールも出来るのかなと思い、まずはそこから広げていこうと考えました。

高橋委員： 佐藤会長お話しが面白く、感心して聞き、大変勉強になる訳ですけども、今言われた事を色々行って参りましたが、1つ壁にぶち当たっている感じがしておりまして、良いアイデアが出たり、バラバラになったりと、そういう感じがしておりまして、それは今、会長が言われましたとおり、それを突き抜けていかなければならないという事だと思えます。今日配布していただいた資料に沢山のヒントがあると思いますが、突き破る部分何かというのが難しく、それを一生懸命頭の中で考えておりました。根拠はありませんが、一つの例として、過疎が悪いと言いますが、どうして悪いのかという価値観の部分からいきますと、過疎も良い部分はあると思えます。過疎の町でしか出来ない事は何かと考えると、子供達の教育に関して自然の中で育てるといいますか、田舎自体も都会化している気がするし、学校なども都会に合わせて行っているの、本当に過疎地でしか出来ないような教育、枠から外れているような突拍子も無いような事を考えていければ、何か違うものが出てくるのではないかなと思います。折角周りには自然がたくさんあるので、海や山などを利用して思いきって教育の形態を変えていくのはどうかと思いました。

佐藤会長： どれを切っ掛けとして、どうやってやっていくかという面白いアイデアが沢山あると思いますが、それらをもう少し近くに寄りながら意見を出して盛り上げていく事で、切磋琢磨されて皆さんが出来そうなものが浮かび上がってくる事を期待します。

柴田(志)委員： このような会議というのは今回が初めてとなり、皆さんは厚田区の事をそういう風に考えていたんだなと思いました。札幌市も近いのですが厚田区は過疎と言いますか店も少ないので、農協関係の店舗もお客さんが来ないからと言ってどんどんと閉じていく訳ですが、その中で閉店されては困るといながらも、物の量的問題もありますが、花川などへ買い物に行ってしまう部分もあり、やはりそこまで深く考えてはいなかったなと思いました。あとは、会場の事も会長の声は聞こえてはいましたが、他の人の意見とかは少し聞きづらいなという部分も感じておりました。

佐藤会長： 特に、みなくる開催の時がそうだと思います。厚田保健センターで協議会をしている時はそんな風には感じませんので、ここの会場については考える方向としたいと思います。

小笠原委員： 皆さんと重なる部分が多いと思いますが、やる気のある人はいると思いますが、それがなかなか広がっていかないのが厚田の問題なのかなと思います。それで少し思うのは、そういう人達を巻き込むようなリーダーシップを持った人を増やすとか育てるという

のが大事なのかなと思います。雪像作りの話しが先ほどのリラックスタイムの中で出りましたが、今回、その雪像を造るに当たって、スキーのために子供を送りに来ていたお母さん達がいつもスキー終わりを待っていたのが解っていたので、どうですかと声をかけると皆やってみたいという事でした。皆、やる気はあるのですが、そういう機会が無くて今まで出来なかったけれども、ちょっとした声をかける事によって出来る事ってあるんだなと思いました。もう一つですが、意見を出し合えるというのは凄く大事な事だと思います。一つ、残念に感じたのは議題の報告事項の際に、配布されている資料が全く無くて、口頭説明だけであったので、叩き台はきちんと出して欲しいと思いました。

美馬委員： 最近特に思っているのが、子供が高校へ行ったり大学へ行った後に、その後どうするのかなと考えた時に、結局は都会に出てしまうのかなと感じてまして、地元で結婚し、子育てをしてと単純に考えられるようなシステムは出来ないのかなと思うんです。結婚したら大体の方が札幌に住んでしまうのかなと思うと、単純に考えても凄く勿体ない気がするので、それをしなくても良いようなまちづくりをしていけたらと思います。厚田の冬の問題も凄く大きいとは思いますが、例えば、今厚田小学校に勤務している先生方も冬は酷く大変な思いをして通勤している方もいるようなので、この辺の対策として、もう少し安心して通えるような地域づくりをしていけないのかなと思います。

柴田(肇)委員： 配布された資料を読んできましたが、厚田と違うところは単一である地域なので、自分達で何とかしなければならぬという意識が我々厚田の人よりも数段高いと思いますので、厚田の場合は札幌に近い事が逆にそこまでの緊迫感が出てこないのかなと思ひまして、そんな気がしながら読ませてもらいました。ただ、何とか良くしようという気持ちはたくさん持っておりますので、一生懸命これから頑張っていきたいと思っております。

渡邊副会長： 会長のお話を聞いて、総論的には本当にこの通りだと思いますし、進めていければ良いなと感じました。どうしても高齢者が多いからとか、前回の時を見ていると割と意見が多かったので、あとはそれをどうポジティブに持って行って各地域の町内会の皆さん、高齢者クラブの皆さん、PTAの皆さんなど、それぞれに何かに所属したりしていると思いますので、そういう方達と一緒に上手く考えて進めていければ良いかなと思います。

佐藤会長： そうだと思います。事務局からも少し意見をいただければと思います。

永澤主任： 先ほど指摘のありました会場の音声の部分とかは、活発な意見を出してもらう為に、次回に向けて検討が必要だと思います。

渡部主任： 先ほど盛重委員から話しのあった昨日の会議の件ですが、確かに話し合いとしては凄く良かった訳ですが、この場と何が違うのかと考えた時に、こだわり隊のPR班の会議という事で目的がハッキリとしており、PRに対しての議論や意見だったので意見が出しやすかったのかなと思います。しかし、この場のテーマはもっと大きいのもっと身近な話題から議論に入るともっと話しが深まるのかなと思いました。

栗谷主査： 小笠原委員の話しにあった雪像の件を聞いていて感じたのは、誘うきっかけを作ったりするリーダー的な方が必要ではないかなと感じました。あの時は小笠原委員がその役目を

していたと思います。この地域協議会は色々な団体や地域から選出されていると思うので、何をするかしないは別としても、そういう担い手として委員の皆さんも出来ると思いますし、自分達も職員として職員側から、また、地域側から、一人一人が何かを持ちながら進めていったら繋がりが出るのではないかなと思いました。

池垣課長： 私も永い間携わってきて、かなり一生懸命やられている方もたくさんおりますけれども、その方達は色んな団体に関わっても一生懸命やっていただいて、その末端の広まっていな  
い、その辺が今後どういう風に取り入れるかというのが難しいところだと思います。一生  
懸命やっている方は、どの団体に所属していても一生懸命やられているというのは解って  
いる事なので、それをいかにしてその他の人達に広げていくかというのが大事ではないか  
なと思います。盛り上がりは盛り上がりで良いとは思いますが、全く盛り上がって  
いない部分もありますので、その辺も上手く取り入れていかないと大変だと思います。一  
つの例として、石狩市全体で区を対抗にして、昔の厚田村で実施していた村民体育大会み  
たいなものを開催しても、盛り上がるのではと思います。

熊谷課長： 区内において、厚田地区にはまちづくりにおけるリーダー的存在の方が多いように感  
じますが、望来、聚富地区には少ないように思います。その少ない地区での人材発掘やリ  
ーダー養成などを取り組んでいけば、厚田区全体の地域づくりが活性化すると思います。

高田課長： 先ほどから色々と皆さんの話を聞いているんですけども、やはり地域にはまだまだ  
色々な事を考えている人達が沢山いると思います。なかなか参加するきっかけが無いとい  
いますか、先ほどの小笠原さんの雪像の話しにあったように誰が声かけする事によって集  
まってしやすい部分があると思うので、まだまだ表に出てきていない・埋もれている・色  
んなアイデアを持っている人がいるハズなので、その声かけと言いますか、引き出すよう  
な策をみんなで考えながら、そういう前面に出てきていないような人を巻き込む仕組み、  
一緒に何かを考えていくようなきっかけ作りが必要と感じました。そういう事が出来ると  
また違う展開になって仲間も増え、今の輪が更に大きくなって地域全体で色々な事が考え  
られるのかなと思います。

尾山支所長： 先ほど高橋委員の方から言われました、過疎地域がなぜマイナスイメージで見られるの  
かという部分で、確かにマイナス思考で見られますが、私の実家は厚沢部町で、日本一の  
過疎の町を目指しておりますが、やはり農家が多いものですから、今、農業後継者確保の  
関係で町としてもかなりのバックアップをしており、就農させるための研修に対する助成  
金であったり、地域に住み、地元の建設業者で家を建てたら何百万というのがあります。  
現金ではなく、その地域で利用出来る商品券にはなりますが、そういう方向で地域に根  
ざそうと考えてやっておりますけれども、町のキャラクターなども札幌市で開催するイベ  
ントがあるとその都度行ったりしており、町としても頑張っているのかなと思いました。  
私自身も厚田に来た時に感じたのは、厚田は一番良い田舎だなと感じました。札幌から近  
く、遊びにも行きやすいという部分もありまして、こちらに来て約40年が経過して、ここ  
が自分の家と言いますか住みかとなっております、皆さんが言ったように人当たりも良  
く、隣近所の付き合いも気楽に声をかけたりしてもらえますし、その辺が僕が来た時も他  
所者という目で見られましたが、数年間住んでいるうちに1人の地域の住民という形で近  
所付き合いもしてもらえるようになりました。心配だったのは、参加して地域振興に協力

してくれる方というのは確かに固定化していると思います。ただ、そこで小笠原委員の言いましたように参加した人が仲間に声をかけて、今日こういうのがあるから行かないかとかという形で仲間を増やしていく事が大切なのかなと思います。次回から、海士町の部分も出てくると思いますが、これも1つの参考例としながら厚田オリジナルのものを作っていければ良いと思うし、ただ、そこであまり高望みをしないで小さな事から1つずつ作っていくのが一番良いのではないかなと私は感じます。

佐藤会長： 次回はその地域住民を巻き込んで地域づくりのうねりをもっと大きくしていくための仕掛けと、今までの同じ団体の人が集まってくるという壁をどう破っていくかという仕組み・計画を含めて次回行ないたいと思いますので、是非、海士町の例を見ながらお考えいただければと思います。

今日はこれで終わりたいと思います。

## 6. その他

平成26年3月28日（金） 18:30 ～ 厚田保健センター 多目的ホール

## 7. 閉会

平成26年3月28日事録確定

石狩市厚田区地域協議会  
会 長 佐藤 勝彦